

付喪神のソレはひっく
り返る

斜志野九星

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

九十九姉妹に滅亡迅雷 netの魔の手が迫る！

目次

付喪神のソレはひっくり返る | 1

付喪神のソレはひっくり返る

人間の里の広場に、琵琶と琴の音色が響き渡る。

付喪神の九十九姉妹が、路上ライブをしているのだ。

初めは立ち止まってくれる人は一人もいなかったが、何日も続けていると次第に人だかりができるようになった。

今では、彼女たちの路上ライブが決定すると、大勢の人が押し寄せてくるほどだ。次第に彼女たちは、人々に音楽を届けることに、生きがいを感じるようになった。だが、そんな日常は突然終わりを告げてしまう。

いつものように、路上ライブをしていた九十九姉妹。

そこに招かれざる客が現れた。

「見つけたぞ。九十九弁々、九十九八橋」

フードを目深に被った謎の人物が、大柄な態度で姉妹の名前を呼んだ。

「私たちに何か用？」

それに気づいた八橋は、謎の人物の方を見る。

「随分と挑戦的だねえ」

八橋の隣で演奏していた弁々が、謎の人物を睨む。

2人は乱暴な客に対しては、実力行使も辞さないのだ。

「私の同志となれい！」

突然、謎の人物は携えていたバックルのようなアイテム——ゼツメライザーを姉妹の腰に接触させた。

すると、ゼツメライザーから百足のようなベルトが飛び出し、2人に巻き付いた。

「何よ、これ……………」

「離れない……………」

弁々と八橋は、ゼツメライザーを外そうとするが、ビクともしない。

そのうちに2人の視界に『滅亡迅雷 net』の文字が現れる。

「ふっふっふ。これでお前たちも私の友達だ！」

謎の人物はフードを脱ぐと、高らかにそう宣言した。

「鬼人…………正邪…………!!」

弁々が苦しみながら、謎の人物の名を口にした。

「さあ、人間共を皆殺しにしろ！」

鬼人正邪は、動けない2人に向かって命令した。

「できない相談ねえ……………」

「私たちは……音楽を聴いてもらうのが好きだから……」

息を切らしながら2人は、鬼人正邪の命令に「反対する。」

だが、彼女たちの思考は着実にゼツメライザーによって蝕まれていた。

「違うな。お前たちの好きなことは下剋上だ！」

鬼人正邪は姉妹の意志を切り捨てる。

「う……………う……………ああああああ……………」

「消えたくない……………」

それを合図に、弁々と八橋の思考は滅亡迅雷・netに汚染された。

「滅亡迅雷・netに接続……………」

そして、2人の目が赤く光った。

「さあ、これを使って人間たちを滅ぼすのだ」

2人の意識がなくなったのを確認した鬼人正邪は、2人にバツタの絵が描かれたアイ

テム——ノプルスゼツメライズキーを手渡す。

「……………」

「……………」

先程までの抵抗が嘘であったかのように、2人は素直に鬼人正邪に従った。

《ノプルス！》

2人がノプルスゼツメライズキーのスイッチが押すと、音声流れる。そして、何の躊躇もなくゼツメライザーに装填した。

《ゼツメライズ！》

その音声を合図に、彼女たちは内側から彼女たちの全てを破壊された。姿も思考も性質も何もかもが、この一瞬でひっくり返った。

2人は自ら付喪神としての自分たちに止めを刺したのだ。

「私たちの好きなことは……」

「人間を皆殺しにすること……」

変容した九十九姉妹——否、ノプルスマガアはそう告げると、背中にある羽をギチギチと鳴らしながら、手近な人間に襲い掛かった。

広場が一瞬にして、悲鳴に包まれる。

人間たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

だが、ノプルスマガアは驚異的なジャンプで人間たちに追いつき、鋭い顎で人間を1人ずつ殺していく。

「新たな下剋上の始まりだ！」

鬼人正邪はその様子を嬉しそうに見つめ、高らかに幻想郷への反逆を宣言した。